

## 面白き こともなき小見野を 面白く

昭和57年度卒業 山口 和範

♪校舎の壁、朝礼台の上、体育館の幕～

尾崎豊の「卒業」と思いきや、私の問題児ぶりを象徴する3大アセットである。校舎の壁に落書き、授業準備を怠り朝礼台で1時間正座、体育館の自動開閉の幕に皆でぶら下がって壊す。この他通学班脱走、授業ボイコット等々。そんな私にも学級委員や鼓笛隊主指揮や体育部長といった重職を与え、熱心に指導する先生方がいた。それと兄弟姉妹のような上下級生や25人の同級生のおかげで、1970～80年代にかけての私の小学生時代の記憶はきらめく宝物として残っている。朝に放課後に、校庭でドッジボールやサッカー、田んぼで野球や缶けり、それにカブト虫やザリガニを捕って遊んだ記憶。女の子に追いかけて回された記憶(笑)。そして始業前や夏休みのラジオ体操後のマラソンでは鍛えられ、中学の運動会や高校の部活動で好成績を残すことができた。走力以外にも、まっすぐな心、辛いことがあっても負けない心は、こうして伸び伸びと育った小見野小学校時代があったからこそ培われた素養である。

144年もの長い歴史を持つ小見野小学校がここに幕を閉じる。小見野の人口動態を調べたところ、1950年の3324人をピークに、現在1800人と減少の一途を辿っている。時代や環境の変化とはいえ、学校が無くなると「コミュニティの崩壊」ということが言われる。数年後の衰退した小見野の姿は想像に難くない。

「志を果たして、いつの日にか帰らん」一唱歌「故郷」の一節にあるように、小見野で育ったことを誇りに思い、故郷小見野に錦を飾れるよう頑張っている。ただその飾る場が衰退して無くならぬよう、高杉晋作に倣ってこれからの小見野を「面白く」、イノベーションを仕掛けていく手助けができたらと考えている。それが私の小見野に対する恩返しである。